



お茶を飲みながら、
ぎのわんの歴史を
のぞいてみませんか？

市の発展を支える埋め立て地

宜野湾市は市域を普天間飛行場やキャンブ瑞慶覧が占有するため、都市計画の上で大きな障害となっています。そのため、昭和30年代後半頃から西海岸地域の埋め立てが検討されてきました。そして1964(昭和39)年、伊佐・大山・真志喜・宇地泊・大謝名地域の海岸を埋め立てて、市街地を拡大する計画が決まったので



▲ 伊佐浜の公有水面埋立地 1968(昭和43)年
この年1月には約18haの埋立が竣工しました。



▲ 現在の伊佐浜の埋立地 2014(平成26)年

【問合せ】
市立博物館 ☎ 870-9317

す。事業規模が莫大だったため、なかなか政府の認可が下りませんでした。1967(昭和42)年には宜野湾市と琉球政府設置の琉球土地住宅公社を事業主体とした公有水面埋立工事がスタートし、翌年その一部が竣工しました。
左上の写真は、1968(昭和43)年の伊佐・伊佐浜の航空写真です。海岸にせり出た部分が最初に埋め立てられた部分になります。ここには、70年代初頭に現在の宜野湾浄化センターや、伊佐市営住宅などが建設されました。その後も埋め立て開発は続き、現在の西海岸地域はコンベンションを中心に「経済自立の発展地域」として位置付けられており、県内外から多くの方が訪れる活気ある街となっています。



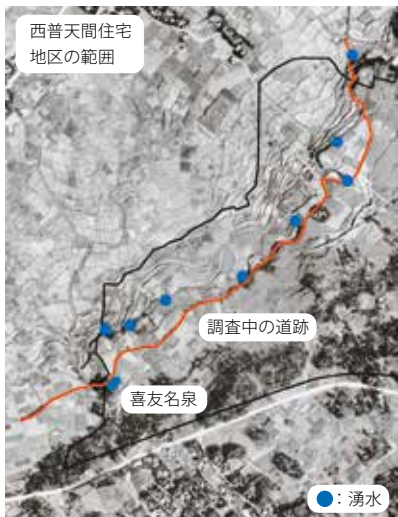
今回は、西普天間住宅地区の緑地帯で調査が行われた、歴史の道について紹介します。

十五世紀後半以降、琉球王府によって首里城を拠点とする幹線道路網が整備され、王命の伝達や役人の往来、租税の運搬などに使用されてきました。

中でも沖縄本島西側を北上するルートは西海道(せいかいどう)と呼ばれており、恩納村では「国頭方西海道」、浦添市では「中頭方西海道及び普天間参詣道」が、いずれも周辺文化財とセットで、国指定史跡として整備されています。



中頭方西海道と思われる道跡



中頭方西海道と思われる道跡と主な湧水的位置

西普天間住宅地区の歴史の道

昨年度、西普天間住宅地区の「斜面緑地」において、雑草木を掻き分けての現地確認や関連資料による調査が行われ、古い時代の道跡が残っていることが解明されました。

同地区のルートは「中頭方西海道」の一部で、山手側のかつての「正路」と思われます。喜友名泉(国指定文化財)を含む複数の湧水をぬうような配置に見えます。

ただ、険しく難儀を極めた道であったため、後の時代に海岸寄りの平坦なルートへ、大幅な改修が行われたことが伊佐浜「新造佐阿天橋碑」資料から読みとれます。

おわりに

本格的な調査はこれからですが、緑地に残る歴史資産が、新しい街の魅力に少しでも寄与されるとうれしく思います。

【問合せ】文化課 ☎ 893-4430